

フランス語中級文法教材の作成（研究ノート）

『フランス語中級文法』について

野村正人

この研究の目的は、フランス語未習者が1年間フランス語の初級文法を学んだあと、主に2年次で使う中級文法教科書の作成である。

まずそうした教科書の必要性から述べたい。

中級文法の位置

現状から述べると、日本で発売されている中級文法教科書の数はきわめて少ない。教科書版では、秋山春夫ほか著『中級フランス文法』（第三書房）があるくらいではないだろうか。しかもこの本の初版は1961年である。

中級文法教科書の少ない理由はいくつか考えられる。まず、大学における第二外国語の授業構成がある。昔から第二外国語では、1年次に初級文法と初級講読を並行して行い、2年次には文学テキストなど比較的レベルの高い文章を読む、という方式になっていた。昔は学生のレベルがそれなりに高かったこともあり、初級文法ですでに高度な内容を含んでいたのも、とりたてて2年次以降で文法を教える必要を感じなかったことがある。また授業時においても文法の基本が終わったのだから、あとは「習うより慣れる」の精神で、講読という実践のなかで高度な文法はそのつど修得されてきたのだと思われる。また、2年次で、さらなる文法事項の修得、確認、復習が必要な者は、市販の参考書を用いていた。現在でも、初級から中級のレベルを含む市販の参考書は数多く出版されている。

中級フランス語の問題

ところが、今に始まった話ではないが、こうしたシステムと現実との乖離は時を追ってますます激しくなっている。学生の学力低下にともなって、1

年次の年間授業回数 25～27 回を使っても初級文法の教科書（しかも教科書のほうも年々内容を削って少なくしている）を終えることができないことは、今では常態化している。こうしたことから、特に初級文法の後半部分の「積み残し」が増える。しかし2年次のクラスは1年次の「持ち上がり」ではないので、結局のところ文法の未修得部分はそのまま放置され、学生の自習に任されてしまう。しかしやらなかった文法を自習しておこうという学生はきわめて稀だと言わざるをえない。また、「積み残し」がない場合でも、(文科省のご指導のよろしきを得て) 授業回数が増えているにもかかわらず、そして教える文法事項が少なくなっているにもかかわらず、学生が初級文法を十分に理解できないまままでいることは、今更述べる必要もないだろう。

またそれに拍車をかけるものとして、外国語のコミュニケーション的側面を重視するという学校教育での方針や傾向がある。1年次もその傾向があるが、2年次では特に、従来のようなテキストを読む「講読」が減り、会話など口頭でのコミュニケーションに重点を置いた授業が増えているし、学生の側もそうした授業を望みがちである。会話を中心とした2年次の外国語教育は「とりあえず授業を楽しく過ごす」ことができるものの、(週1回程度の授業では) 実際の教育効果は薄いと思われるが、ここではその是非は措いておく。口頭でのコミュニケーションの授業は、単純な文章を組み合わせて反復することに主眼が置かれているために、複雑な文法的な知識は必要とはされない。

こうしたことが重なって、「中級文法」の教科書に対する需要は少なくなり、それゆえ教科書会社も教科書版として「中級文法」の本を作ることをしない。

中級文法書の必要性

ところが、いや、それだからこそ、中級文法の教科書が必要となってくる。まずコミュニケーション重視の授業が多くなってきているとはいえ、まだテキストの読解の授業は多数である。そのなかで、初級文法の未消化、「積み残し」が依然として解決されていないという現状がある。教える側も初級文法の未修部分などについて、学生の自習に任せるばかりで、それを補うような手当をあまりしてこなかったことがある。こうしたことがテキストの読解を困難にして

いるのだが、それについては個々の教員の努力はあるにせよ、総合的な手だては講じられていない。初級文法を終えた段階で、現状にあわせて、童話、子供向けの読み物など、ごくやさしいテキストを選ぶという選択肢はあってよいと思うが、いっぽうで内容としてある程度高度なものを読ませる選択肢も用意し、学生に「背伸び」させるクラスも、特に本大学の文学部などでは必要であるし、学生の希望も少なからずあると思われる。

こうした現状において、初級から中級への橋渡しをするための教科書があれば、2年次以降においてそれなりに高度なフランス語のテキストを読めるようにするという目的達成の一助になるのではないだろうか。

中級文法書の目的

ではどのような「中級文法」教科書が考えられるのか。その目的は、「テキストを読解するための中級文法書」である。対象は、第二外国語としての初級フランス語文法を一通り終えた学生（上に述べた文法事項の「積み残し」があってもかまわない）、あるいは第一外国語としての初級フランス語文法を一通り終えた学生（主にフランス語圏文化学科の学生）である。第二外国語の場合であれば、「中級文法」専門のクラスをつくることが考えられる。あるいはまたひとつのクラスで「中級文法」の項目を適宜選択して教えつつ並行して講読を行う。フランス語圏文化学科のような第一外国語の場合であれば、「基礎演習Ⅱ」のクラスで中級文法を教えることが考えられる。

中級文法書の内容

「中級文法」の内容であるが、網羅的に扱うことをせず（このためには市販の参考書がある）、初級文法で重要であるにもかかわらず間違えやすいもの、理解しにくいもの、あるいは初級文法では大きく扱われていないが、テキストの読解には重要なものを選び、そこを重点的に扱うことにする。また初級文法教科書の項目立てにこだわらず、全体が見渡せるような別の分類方法を採用し、できるだけ他の文法項目と関連づけられるように配慮する。

中級文法書の全体的な構成

そこでまず、「中級文法」が取扱う項目を以下の10項目とする。

1. 過去時制、2. 未来時制、3. 条件法、4. 接続法、5. 不定法、6. 現在分詞、7. 直接話法と間接話法、8. 代名動詞、9. 知覚動詞、使役動詞、10. 中性代名詞。

各項目は以下の3点から構成する。1. 文法説明、2. 練習問題、3. 長文解釈。

1. 文法説明

ここでは、初級文法の説明の繰り返しではなく、簡潔な説明を心がけ、とくにテキストを読むための文法という視点から文法事項を整理するよう配慮した。また、やさしい例文をできるだけ多くつけることによって、文法事項の具体的把握をめざした。原則として例文には日本語訳をつけないが、わかりにくいものに関しては日本語の訳例をつけた。この段階では事項の理解が主眼だからである。

2. 練習問題

ここでは、一行程度のフランス語を訳す問題を10 - 20題程度挙げる。「条件法」など重要な項目については「基礎問題」「発展問題」の2段階にわけ、できるだけ多くの問題を与えることとした。またレベルとしては、比較的易しいものから文学テキストの引用まで、幅広い文例を挙げ、多様な文章に慣れる機会とした。

3. 長文解釈

ここでは、10~15行のフランス語の文章を訳させる。この文章は、当該の文法事項を多く含むようにつくられたティエリ・マレ教授のオリジナルなテキストである。また長文解釈では単に訳読をさせるだけでなく、別の工夫も施した。長文に10題程度の設問をつけて、解釈の助けになるようにした。設問は本文の解釈で重要な箇所やわかりにくい箇所に施し、その設問が本文の解釈の助けになったり、正しく本文が解釈されているか確認できるような問題をつくった。またそれにとどまらず、フランス語の重要な表現が出てきた場合、それを使っ

た短い例文を訳す問題もつくった。例文には文学的なテキストからの引用を数多く入れるよう心がけ、この文法教科書が文法の理解のみならず、フランス語の読解力向上につながるよう配慮した。

重要項目の説明

上に10の文法項目を挙げたが、とくに重要だと思われる項目は、1.過去時制、3.条件法、7.直接話法と間接話法、8.代名動詞、である。ここでは、この4項目について文法書のなかで強調した点を示す。ただし、もっとも重要な「条件法」の説明は最後に行う。

1. 過去時制

過去時制に関して特に重要な点は、半過去の理解であり、半過去と複合過去（単純過去）の違いである。これは初級者だけでなく、かなり高度なフランス語を扱える者にとっても、使い分けの難しい時制である。「初級文法」では、用法として「過去における状態や継続的動作、習慣的動作を表す」「点的な出来事を表す複合過去・単純過去にたいして、その背景となる状態を表す」を挙げて簡単な記述にとどめている。

ここでは半過去の基本的な意味である「未完了」「継続」から出発して、そこから生まれる様々な用法を解説し、半過去の全体像を提示する。とりわけ、まず「未完了」「継続」とはどういうことかを、行為の行われる時点とそれを叙述する視点から、詳しく解説し、理解できるようにした。その後、半過去の用法を、1.不完了あるいは継続、2.基準となる過去の時点にたいする同時性、3.仮定、4.勧誘・誘惑、5.語気緩和、6.親愛の情を示す半過去、7.その他 にわけ、それぞれ用法の解説と、理解を助ける例文を載せた。

7. 直接話法と間接話法

初級文法では詳しくは触れられていないが、多少なりとも物語的な要素を持つテキスト、とりわけ小説などの文学テキストを読む場合、直接話法・間接話法を理解していることはきわめて重要である。中学校・高校などでは英語の授

業で話法の変換を詳しく学び、直接話法を間接話法に、間接話法を直接話法に変換する練習をする。しかし、実際、文章を読むうえで重要なのは間接話法を直接話法に変換する場合である。間接話法、自由間接話法で書かれた登場人物の言葉を直接話法に変換して理解する必要があるからだ。したがって、ここでは間接話法を直接話法に変換することに重点を置く。

まず、間接話法を直接話法に変換するときの重要な点は3点である。1.人称代名詞の変換、2.時制の変換、3.シフター（「今」「ここ」「あした」など、発話行為に依存している要素）の変換。

その点を理解したあと、間接話法の文を1.肯定文、2.単純な疑問文、3.疑問詞のついた疑問文、4.命令形の文、の4種の形態別に、解説と例題を示す。

そのうえで、文学的テキストで重要な「自由間接話法」についても言及する。理論的な側面は措くとして、この話法では、語り手の言葉か登場人物の言葉かの決定しがたさがあり、それがまさに自由間接話法の魅力になっている点と、その微妙な解釈の仕方を、いくつかの典型的な例を使って示す。

8. 代名動詞

代名動詞に関して、まず強調しておくべきことは、代名動詞がふつうの目的格人称代名詞を使った構文から派生したもの、という点である。初級文法では「人称代名詞」と「代名動詞」が別個の項目として立てられているため、これらふたつを関係づけて理解していない学生が多く見られる。まず目的格人称代名詞変換と代名動詞が同じ原理でできていることを説明し、理解させることが重要である。

それをふまえて、代名動詞の重要なポイントを3つに絞る。1.直説法現在と直説法複合過去の活用（この活用ができない学生が多く見られる）、2.4つの用法（再帰的、相互的、受動的、本質的）、3.複合形の場合の性数一致（これについては直接目的語、間接目的語の区別から説明すべきである。ただ性数一致の問題はあまり強調しすぎないほうがよい。活用も満足にできないのに、性数一致ばかりを覚えようとする学生が多く見られる。）

なおテキスト読解のための文法という面から考えると、とくにふつうの受動

態と代名動詞の受動的用法の違いを強調しておく必要があるだろう。一般的に受動態は動作の「完了」「結果」「状態」、代名動詞の受動的用法では「動作」そのものを表すことが多い。4つの用法（再帰的、相互的、受動的、本質的）の説明と例文を挙げるだけでなく、ふつうの受動態と代名動詞の受動的用法を比較でき、その違いを明確にできるような例文を提示することが重要である。

3. 条件法

最後に残った「3. 条件法」については、ここでやや詳しく説明する。

条件法は、叙述の内容にたいする話し手の心的態度を表す叙法という観点からして、直説法とならんで非常に重要である（接続法は、多くの場合、従属節中に現れるので、その叙法的価値は、直説法、条件法に比べてきわめて限定的である）。条件法は高い叙法的価値を持っており、仮定的表現を初めとして、文章にさまざまなニュアンスを込めることができるので、とくに初心者にとってその解釈が難しい。

初級文法では、多くの場合、叙法にかんして、「低い可能性、非現実性」の説明を中心に行い、そこから発した「不確実性」「語気緩和」「反語」を簡単に解説するにとどめている。しかしテキストを読むための文法という視点からすると、条件法は上に挙げた叙法的価値からして解釈を誤らせる可能性が高く、おそらくもっとも重要な項目のひとつである。したがってもっと幅広い用法を提示する必要がある。

条件法の叙法に関する用法に関しては、1.「低い可能性、非現実性を表す場合」2.「仮定的なことがらを述べる場合」3.「語気緩和のニュアンスを表す場合」4.「伝聞・推測・疑惑を表す場合」5.「抗議・拒絶など強い感情を表す場合」の5つに分類する。もちろんこうした用法を列挙するだけでなく、用法間の関連性を説明し、重要度に応じて階層化する必要がある。

まず初級文法でも行われているように、「低い可能性、非現実性」から説明を始めるのが適当だ。これに関しては初めに、1.「Si + 直説法半過去, 条件法現在」、2.「Si + 直説法大過去, 条件法過去」の2つの重要な構文を説明する。その後、バリエーションとして、「Si + 直説法大過去, 条件法現在」「Si + 直説法

半過去、条件法過去」もありうることを示す。また特に、「Si + 直説法半過去、条件法現在」の構文の特徴を明らかにするために、ふつうの仮定文「Si + 直説法現在、直説法現在（単純未来）」との比較を行うことも必要である。

以上のことがらを踏まえて、次には、テキスト解釈のレベルで重要と思われる「条件節を欠く場合」を説明する。上記の「条件節+帰結節」の組み合わせでできている構文については、初級文法を終えた学生が解釈する場合、あまり問題がないように思われる。しかし、条件節を欠く文章の場合、条件節のかわりに「条件節相当語句」が文章のなかに潜んでいることが多いのだが、これを感知するには前後の文脈、書き手の言わんとするところがつかめていなければならない。「Si + 直説法半過去、条件法現在」が出てきたからこう訳せばよいというような機械的作業がしにくいのである。だから学生はなかなかうまく意味をとらえることができない。中級レベルでは、結局、いくつかの典型的な例文を読み、そのうえで様々な種類の文章を自分で訳して慣れるしか方法はない。ここではそうした典型的な文を挙げ、学生に「条件節を欠く場合」に慣れさせることとする。

次に「Si + 条件法、直説法半過去（大過去）」の構文のバリエーションとして、「帰結節を欠く場合」を説明する。この構文は純粹な意味での条件法ではないが、「条件節を欠く場合」との対称性を考えてここで教えておくと、学生も理解しやすい。「もし～ならば、いいのに」「もしあのとき～しておけば、よかったのに」「もし今～すれば、・・なのではないか？」という構文が、帰結節をなくして、願望や遺憾、あるいは勧誘・提案などを示すことになるからだ。

さて、「低い可能性、非現実性」以外の条件法の叙法に関する用法だが、重要度でいえば、上に挙げたとおり、1.「低い可能性、非現実性を表す場合」、2.「仮定的なことがらを述べる場合」、3.「語気緩和のニュアンスを表す場合」、4.「伝聞・推測・疑惑を表す場合」、5.「抗議・拒絶など強い感情を表す場合」の順であろう。ただ、3.「語気緩和のニュアンスを表す場合」は初級者でも *Je voudrais* ～ などの会話文でなじみが深いだろうから、理解しやすい。また5.「抗議・拒絶など強い感情を表す場合」は、感嘆文や疑問文なので、基本がつかめていれば、誤解は少ないのではないだろうか。

したがって、条件法の用法としては2.「仮定的なことがらを述べる場合」および4.「伝聞・推測・疑惑を表す場合」に比較的時間をかけて説明し、また例文もより多く与える工夫が必要であろう。

すでに各文法項目の構成について述べたように、ここでも、条件法の文法的事項には簡単で典型的な例文をつけて、その説明を具体的な文章で確認できるようにしている。そしてひとつおりの文法説明のあとに、練習問題が置かれている。この練習問題は、一行程度の短文で、様々な用法からなるものをアトラダムに並べてある。またそのレベルは会話的なものから文学テキストの引用まで幅広いものとなっている。

また、条件法の項目の最後に置かれているのが、10行程度の比較的最長い文章である。この文章はさまざまな条件法が織り込まれたオリジナルのテキストである。学生このテキストを解釈させ日本語訳をつけさせることによって、条件法が正しく理解できているかどうかを確かめることができる。もうひとつの工夫は、このテキストを問題文として、10問の設問を設けたことである。設問には、本文を正しく理解したかどうかを見極める問い、わかりにくいと思われる文に類似した文章を訳させる問いなどを入れて、設問が本文理解の助けになるようにした。

またそればかりでなく、文中に現れる重要表現を覚えさせるために短い例文を和訳する問題も入れた。こうすることで単に文法の概説だけにとどまらず、解釈能力の向上へとつなげようと考えた。なお、この条件法の長文解釈については、末尾に付録として実際に作成したものを挙げておく。

終わりに

以上の中級文法書は、「条件法」「接続法」などいくつかの項目については、本年度のフランス語圏文化学科の「基礎演習Ⅱ」において実際に使用して、文法説明、例文、練習問題、長文解釈などのレベル、使いよさなどを検証した。こうしたことは、他の項目についても引き続き行わなくてはならないし、また第二外国語の中級クラスでも行うことによって、加筆修正しながら、学習院大学の学生により使いやすい文法書にしていく必要があるだろう。

付録 「条件法」を使った長文解釈の問題

Comment Théodule aurait-il pu penser qu'Adélaïde aimait les raviolis (1) ? Pour sa part, si quelqu'un lui avait demandé son avis, il aurait répondu qu'une telle chose lui semblait impossible. Qui serait assez fou pour aimer les raviolis (2)? « Adélaïde, une jeune femme si raffinée, aimer les raviolis ? Ah ! j'aimerais bien voir ça ! » se disait Théodule (3), se promettant (4) qu'il ferait taire les mauvaises langues qui répandaient de tels mensonges (5).

Parfois pourtant il devenait mélancolique en se demandant (6) s'il n'y aurait pas quelque chose de vrai dans toutes ces fables (7) . Car il n'y a pas de fumée sans feu, dit le proverbe, et pourquoi tant de gens affirmeraient-ils avoir vu Adélaïde manger des raviolis, si elle n'en avait jamais mangé de sa vie (8)? Il conviendrait cependant de remarquer qu'il existe une certaine différence entre manger des raviolis et aimer les raviolis (9). Peut-être est-ce justement parce qu'Adélaïde était une jeune femme raffinée qu'elle mangeait des raviolis alors qu'elle ne les aimait pas (10).

1. Comment Théodule aurait-il pu penser

① 次のフランス語を訳しなさい。

- 1) Comment aurait-elle pu savoir que la solitude n'était pas une amie ?
- 2) Comment aurais-je été sûre de moi quand, pendant toute mon enfance, on m'a dit que j'étais imparfaite, médiocre ? [Maurois]
- 3) Avec son orgueil, comment aurait-il pu accepter une récompense aussi modeste?
- 4) Comment aurait-il pu aimer, intelligent comme il était, une petite personne, dont l'insignifiance et la médiocrité frappaient les yeux de tous? [R. Rolland]

2. Qui serait assez fou pour aimer les raviolis ?

① 次のフランス語を訳しなさい。

- 1) Qui serait assez fou pour tenter de vendre sa voiture à 30.000 euros, alors

qu'on peut facilement en trouver une de la même qualité à 10.000 euros ?

2) Qui serait assez riche pour se permettre cette fantaisie ?

3) Qui serait assez bête pour tenter de faire traduire une phrase aussi compliquée ?

3. se disait Théodule

① 次のフランス語を訳しなさい。

1) Chaque fois qu'ils se séparent, ils se disent qu'ils s'aiment passionnément.

2) Je ne vous ai pas écrit parce que je me suis dit que j'arriverais à Paris avant ma lettre.

3) Ne dis pas ça, c'est un gros mot. Ça ne se dit pas.

4) Il y a des choses que l'on peut dire aux autres ; et d'autres, qu'on ne peut dire qu'à soi-même... Et d'autres, qu'on ne peut même pas se dire à soi-même.

[Valéry]

5) Michel Strogoff prêtait une oreille attentive à tout ce que se disait, mais il ne se mêlait point aux conversations. [Verne]

4. se promettant qu'il ferait

① 次のフランス語を訳しなさい。

1) Cette plage est tellement belle que je me suis promise d'y revenir avec mon petit ami l'année prochaine.

2) Elle se promettait d'économiser, afin de rendre plus tard. [Flaubert]

3) Adélaïde ayant deux amants, se promit au premier, se donne au second.

5. il ferait taire les mauvaises langues qui répandaient de tels mensonges

① 次のフランス語を直接話法にかえなさい。

1) Théodule a pensé qu'il ferait taire les mauvaises langues qui répandaient de tels mensonges.

② 次のフランス語を訳しなさい

- 1) « Tirez le rideau, la farce est terminée ! » Telles furent ses dernières paroles.
- 2) Tel que je le connais, il refusera certainement cette proposition.
- 3) Cela m'a fait un tel saisissement, que je suis resté un grand quart d'heure tout pâle, sans pouvoir me remettre. [Gautier]

6. en se demandant

① 次のフランス語を訳しなさい。

- 1) Je me demande si j'ai eu raison d'accepter.
- 2) Il se demande pourquoi sa petite amie n'est pas venue le voir.
- 3) Se douterait-il de quelque chose? se demandait Léon. Il avait des battements de coeur et se perdait en conjectures. [Flaubert]

7. s'il n'y aurait pas quelque chose de vrai dans toutes ces fables

① つぎのフランス語を訳したうえで、本文の il n'y aurait pas quelque chose de vrai の条件法と同じ使い方をしている文を選びなさい。

- 1) Auriez-vous l'amabilité de me dire votre nom ?
- 2) Je cherche une étudiante japonaise qui pourrait travailler avec moi cet après-midi.
- 3) Ce serait hier que sa femme a quitté sa maison.

8. si elle n'en avait jamais mangé de sa vie

① 次のフランス語を訳しなさい。

- 1) -- Jette ce cigare! -- Jamais de la vie! Elle vint à lui, lui prit violemment son cigare, le jeta dans la cheminée. [Van der Meer]
 - 2) Il y avait un voleur dans son appartement. De sa vie, elle n'avait jamais eu tant de peur.
- ② n'en avait jamais の中性代名詞 en が指しているものをフランス語で書きな

さい。

9. il existe une certaine différence entre manger des raviolis et aimer les raviolis.

- ① 冠詞に注意して、つぎの日本語をフランス語にしてください。
- 1) 私はお金を持っていません。
 - 2) 私はお金が必要なんです。
 - 3) 彼は猫が嫌いです。[avoir horreur de ~ を使って]
 - 4) 私は、パンとリングとミネラルウォーターを買いに行きます。

10. Peut-être est-ce justement parce qu'Adélaïde était une jeune femme raffinée qu'elle mangeait des raviolis.

- ① **C'est justement parce qu'Adélaïde était une jeune femme raffinée qu'elle mangeait des raviolis.** は強調構文である。強調構文ではない、ふつうの複文にしてください。
- ② 次のフランス語を訳してください。
- 1) Ce n'est pas ce document que nous demandons.
 - 2) C'est en pleurant qu'elle m'a avoué la vérité.
 - 3) C'est quand on est malade qu'on éprouve la profondeur de l'amour maternel.
 - 4) Est-ce pour me tromper que tu m'as dit qu'elle t'avait quitté ?